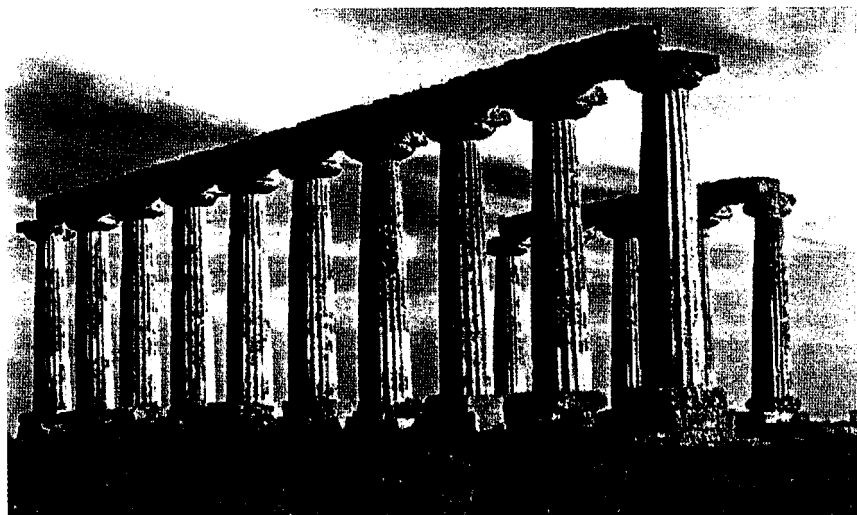


第 10 章

『イオニア海のほとり』

(*By the Ionian Sea*, 1901)



Metaponto

It is the ruin of a temple to an unknown god, which stood at some distance north of the ancient city; two parallel rows of columns, ten on one side, five on the other, with architrave all but entire, and a basement shattered. The fine Doric capitals are well preserved; the pillars themselves, crumbling under the tooth of time, seem to support with difficulty their noble heads. (49-50)

作品の梗概

1897年11月5日(金)に『チャールズ・ディケンズ論』をシエナ(Siena)で書き終えたギッシングは、当時知り合ったアメリカ人とローマで会った後、11月10日(水)夕刻にナポリ(Naples)に入り、翌々日イギリス領事館を訪れ、カラブリア(Calabria)地方でコンタクトを取れる人への紹介状を書いてもらう。『イオニア海のほとり』の記述は、その日の昼、様変わりしていくナポリ市内を歩き、トレド通り(Toledo)のなじみの店「トリノのジアルディニ」(Giardini di Torino)で食事をする(1888年11月22日の日記によると、「ナポリで一番よくかつ一番安い店、見つけるのが遅すぎたくらいだ」とある)くだりから始まる。船でナポリを発つのが16日午後である。

11月17日(水) 午前8時前にパオラ(Paola)に到着し、ホテルで朝食をとる。乗る予定の郵便馬車がすでに出てしまっていたため、別の馬車を雇って10時に最初の目的地とも言えるコゼンツァ(Cosenza)に向かって出発する。2時間ほどかけて山を登り、はるばるシバリス(Sybaris)の城壁のほとりを通してイオニア海にそそいだ^{いしし}古のクラティス川(Crathis)、現クラティ川(Crati)の溪谷の眺めを楽しむ。コゼンツァまでの数時間の旅は天候にも恵まれる。夕方4時にコゼンツァ着。悪臭の漂う、ひどいホテルに宿泊する。

11月18日(木) 曇り。一日中町を歩く。この町での最大の関心事は、西ゴート族の王アラリック(Alaric)を葬ったとされる墓がどのあたりにあるかを実際に見てみる点にあった。町を流れる2つの川が合流する地点にアラリックが葬られ、その際埋葬に従事した奴隷はすべて殺されたとベデカー等でも伝えられているが、¹実際の地理を確認してみると不自然な点が目に付く。川の合流地点は町のごく入口近くにあり、埋葬地点の秘密を守る口封じをするのなら、当時の町の住民を全員殺さなければならなくなる。もしアラリックが葬られたとすれば、地理的に見て少なくとも1マイル先の山あいでは川が見えなくなっているあたりではないかと推定する。

カルタゴ(Carthage)の名将ハンニバル(Hannibal)が第2次ポエニ戦争末期、コゼンツァを通してコトローネ(Cotrone)へ行き、そこから本国に船出したこ

とを追想する。ハンニバルの生涯で最初にして最大の敗北となるザマ (Zama) の戦いの前夜、落日の勇将の後姿をギッシングは思い描いたことであろう。

11月19日 (金) 朝7時10分の列車でタラント (Taranto) へ向かう。メタポント (Metaponto) やシバリスなど、同一ルートを2回通ることになるが、タラントの博物館の館長に会い、かなり未開の地域とされる沿岸地域を訪ねる前に種々の助言を得たいと考える。翌20日 (土) は博物館の休館日。

11月21日 (日) 博物館のカルソ館長 (Eduardo Caruso) を訪ねる。ナポリのイギリス領事館でもらった紹介状を渡す。そのあとホラティウス (Horace) が愛した、そしてウェルギリウス (Virgil) もその近くで創作したと伝えられるガラエスス川 (Galaesus) を見に出かける。川とはもう名ばかりとなったガラエスス川 (と思われるもの) を見て感慨にひたるギッシング。

11月22日 (月) ギッシング40歳の誕生日。激しい北風が吹く。イギリス領事を訪ね、メタポントやシバリスのことを尋ねるが、領事は地図を見なくてはわからない有様であった。

11月25日 (木) 未明、突然列車の時刻が変更になったとの知らせを聞き、半信半疑で駅に行く。果たして4時56分発が4時15分発に変わっていた。メタポントには6時過ぎ到着。朝食をとって9時過ぎに徒歩で神殿の跡を見学に行く。ピタゴラス (Pythagoras) が紀元前497年当地で亡くなったことなども思い出す。そのあと列車でコトローネに向かう。途中の沿岸地域の風景は変化に富み感銘を受ける。夜10時にコトローネ着。コンコルディア (Concordia) という旅館に宿泊。

11月26日 (金) 曇り、午後少し雨。海岸近くを散策。すばらしい眺めを楽しむ。市長を訪ねオレンジ園の見学の許可をもらう。コトローネはほとんど雨が降らず、川は川でなくなっている。

11月27日 (土) アルプスおろしの強い北風。午後町の裏手の丘に登りコトローネのスケッチをする。城や港をスケッチし、墓地などを歩く。夜になってどんどん熱っぽくなるのを感じ、そのまま眠られぬ夜を過ごす。

11月28日 (日) 朝気分がすぐれないため、散歩のあと医者を呼んでもらう。4時に医師が来る。風邪との診断。前日北風の吹く中で、スケッチをするという愚かなことをしたからだと考える。

11月29日 (月) 熱は続く。医師のスクルコ先生 (Riccardo Sculco) は朝と夕方の2回往診に来てくれる。感じのいい、親切な、ギッシングと同年代のスクルコ先生は、スープしか口に入らない病人にスタミナをつけるためか、ピフテキを食べるように冗談風に勧めたりする。

12月1日 (水) 少し快方に向かう。ただし右の肺にかなりの充血が見られる。旅館に出入りする人々は無骨な者が多いが、なかなか親切である。おかみと召使女は始終けんかをしている。1日に2度少年が新聞を届けてくれる。客室係の少年は、(スクルコ先生を除けば)当地で出会った人の中で最も洗練されたように見えた。食べ物はひどい。ヤギの乳以外は口に入らない。

12月2日 (木) さらに快方に向かう。食欲が出てくる。スクルコ先生は当地で雨が降らない原因は森の喪失にあると言う。古代においては、海岸線一帯が森に覆われていたのではないかと推測する。

12月5日 (日) 前日から嵐になり、一晩中強風が吹き荒れる。朝になり晴れるが、風は依然強い。新聞配達の少年は病気で来なくなる。もっと乾いた空気に触れたいと思い、また局留めで郵便物が着いているはずのカタンツァーロ (Catanzaro) に行こうと決心する。唯一の心残りはラキニア岬 (Lacinian Promontory) にあるヘラの神殿 (Temple of Hera) の跡を見に行けないことである。強風のため船で行くことはできず、また道も整わない陸地を2時間半かけて歩くことも不可能で、結局断念するしかなかった。

12月6日 (月) 晴れ。午後1時56分(20分遅れたが)の列車でコトローネを後にする。ある駅で乗ってきた乗客はいかにも健康そうで、食欲も旺盛なので、その男につられてギッシングも力がみなぎってくるような気がしてくる。そしてその男はカタンツァーロの住民とわかる。半病民みみたいな人間が多いコトローネと比べ、山地のカタンツァーロの住民はいかにも健康そうに思える。6時カタンツァーロ到着。

12月8日 (水) すばらしい日和。紹介状を持ってイギリスの副領事を訪ねる。副領事は公園、ドゥオーモ (Duomo) そして教会などを案内してくれた。この町は古代都市ではなく中世初頭に作られた町だが、健康で幸せそうな子供たちの姿を見ることは実に心地よい。ワインも本当に気に入る。

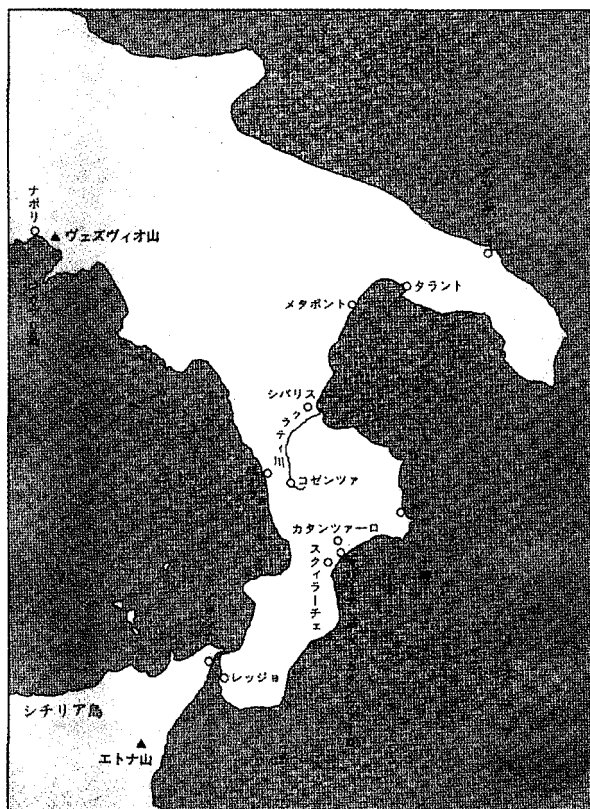
12月9日 (木) 曇り。副領事と博物館などを見学する。

12月10日 (金) 曇り。朝9時副領事の見送りを受けて馬車でカッシオドールス (Cassiodorus) ゆかりの地、スクイラーチェ (Squillace) に向かう。途中雨脚が強くなる。カタンツァーロよりずっと未開の地という印象を受ける。スクイラーチェで一晩過ごす予定でいたが、その旅籠があまりにもひどいのでやめにする。食事を取って(とても口にできない代物)、城跡などを散歩した後、2時30分に鉄道の駅に行く。そこから歩いて近くのグロッタ (Grotta) と呼ばれる洞穴を見物する。ここがカッシオドールスの言う養魚池かもしれない、と過去に思いをめぐらす。4時30分の列車に乗り込む。レッ

ジヨ (Reggio) には午後 11 時に到着。

12月11日(土) イギリス領事を訪ねるが不在。公園などを散歩して、昔のものを破壊してしまう現代のイタリア人に憤りを覚える。

12月12日(日) 午前中市営の博物館を訪れる。帰り際、来館者名簿に名前を書くように館長から言われる。その中に F・ルノルマン (François Lenormant) の名前を見つけ深く感銘を受ける。ルノルマンは今回の旅の中心となった旧ギリシャ植民市、マグナ・グラエキア (Magna Graecia) の世界を詳述し、ギッシングも熟読した本を執筆したフランスの考古学者。館長は 1882 年に訪ねてきたルノルマンのことをよく覚えていた。すばらしい青年だったとのこと。旅の幕切れとしてはまたとない「出会い」であると感じる。7時5分の列車でレッジヨを發つ。翌朝7時45分ナポリに到着。



ギッシングの「詩と真実」

第1節 『イオニア海のほとり』執筆の背景

ギッシングはギリシャ、ローマの古典古代の世界への旅を3回行っているが、²『イオニア海のほとり』で描かれている第3回目のカラブリア地方への旅は、その目的意識、旅の性格という面で、基本的にはその前の2回の旅とは多少とも異なっているように思われる。最初の2回は古典愛好家による、代表的な都市や遺跡を廻るという、実にオーソドックスな旅行と言えそうだが、最後のイタリア旅行は、どちらかと言うともう少し目的を限定した、ある意味で「行きたい」というより「行かなくては」という思いの方が強く出ている。そもそも何故シチリア (Sicily) ではなくカラブリアなのだろうか。少なくとも初めてイタリアを訪れた時点では、ギリシャを除くと次にぜひ訪れるべき場所は「ギリシャとローマの両方がある」(Letters 4: 6) シチリアだとはっきり述べていたのではないか。³ いったいどのようにしてギッシングは、体調の不安を抱えているのに (Diary 448),⁴ 夏はマラリアがはやり、追いはぎなども多発している (Letters 6: 367) 南イタリアに行くことを望むようになったのであろうか。そこで最初に、『イオニア海のほとり』という作品を理解する上での背景、作品の成立事情を確認しておきたいと思う。

イタリア行きを意識する直接の契機は1897年春以降の読書経験にある。特に1897年2月、妻との不和と肺病の療養のためにデヴォン (Devon) 州のある町に転地した後、ギッシングの読書傾向がシステムティックになっていくのは注目に値する。2月下旬から3月中旬頃は主にディケンズの小説を読んでいたようだが、3月中旬から4月上旬頃 (と推定される) に、グレゴロヴィウス (Ferdinand Gregorovius, 1821-91) の『中世ローマ都市の歴史』(Geschichte der Stadt Rom im Mittelalter, 1859-72) の第1巻を読了すると、その読書には一貫性を持った研究という性格が前面に出てくるようになる。ギッシングはこの本から、後の『ヴェラニルダ』となる歴史小説執筆へのよい着想を得たという (Diary 435)。そしてこれ以降、6世紀の東ゴート族による

イタリア支配の時期に関しての本格的な研究が始まるが、ここで押さえないのは、ギッシングをその研究へと駆り立てた主な動機は何かである。

ギッシングの歴史小説執筆への思いは、1884年出版された『無階級の人々』の中の登場人物の一人に託してすでに述べられていたが、⁵本格的に構想を具体化し始めたのは1895年半ば頃と考えられる。⁶しかしその時点では4、5世紀のローマ帝国時代に関する読書が中心で、それが97年には6世紀の方に移っていったらしい。グレゴロヴィウスの本から受けた「中心的なモチーフへのよい着想」として、4月6日付けの書簡でギッシングは間接的に「聖ベネディクトゥス (St. Benedict) とカッシオドルスの二人がともに効果的に登場する」(*Letters* 6: 262) と述べている。カッシオドルスは、「その治世のうち30年間、イタリアの幸福はこの上もなく、旅人ですら平和であった」と同時代人からも讃えられた、⁷時のイタリア支配者テオドリクス大王 (Theodoric) の信頼厚い大臣として活躍した人物である。その二人について、グレゴロヴィウスは、「片やローマ人で最後の元老院議員、片やゲルマン人で最初のゴート族のイタリア王、一方は古代文明を代表し、もう一方は好学な北方の蛮人であるこの二人は、この上なく興味深いドラマを互いに共同し合う中で演じきっている」と語っている。⁸またその共同から、「ゲルマン的ローマの中世期全体と同様に、その後幾世紀にも渡って続いていくイタリアとドイツの最初の和合が予言的に照らし出されてくる感がある」(Gregorovius 284) と記述しているが、そうした部分からギッシングは興味を膨らませていったと思われる。このように、ギッシングは6世紀のローマ帝国史をユスティニアヌス (Justinian) 皇帝の東ローマ帝国側からではなく、やがて彼らによって滅ぼされることになる東ゴート族の側から眺めている。⁹6月13日に読み始めたホジキン (Thomas Hodgkin, 1831-1913) の『イタリアとその侵略者』(*Italy and Her Invaders*, 1879-99) の第3巻の冒頭にある次のような一節、「イタリアにおけるチュートン民族国家の設立は人類の幸福を促すように思えた。これにより蛮族の持つ勇ましさの中で最も気高く、イタリア人の文化の中でも最も洗練されたもの全てが引き出され、その両者がともに融合し、1つの調和の取れた全体が作り出されると思われた」¹⁰なども印象を与えたかもしれない。ベネディクトゥスへの関心も同じ文脈で理解できる。ギボン (Edward Gibbon, 1737-94) によれば、¹¹ベネディクト派は粗衣粗食を旨とする修道生活を送ったとあるが、グレゴロヴィウスはベネディクトゥス自身に関して、「道徳的に従うというキリスト教の考え方を実現し、謙譲と愛、無私と道徳的自由、そして最終的に財産の共有を実践しようとした」と記述している。¹²そして

6月15日付けの書簡で、歴史小説のテーマとして「キリスト教の理想と旧ローマ精神の間の葛藤を取り上げるつもりだ」(Letters 6: 302)と言っているが、カッシオドールスの本を取り寄せて精読し、その他にも様々な研究書を紐解いていくギッシングにとって、歴史的事件そのものよりも、異文化の衝突と融合、神への信仰と人間の愛の問題はかなり心を揺り動かされるものだったであろう。

カッシオドールスやベネディクトゥスがスクイラーチェやモンテ・カッシーノ(Monte Cassino)で暮らしたことを考えれば、南イタリアへの関心が強まるのは必然的と言える。そして実際にその点前面に出始めるのは8月以降である。8月18日の書簡で「マグナ・グラエキアに関する歴史的研究に大いに没頭」し、「カラブリアの農民の歌声が聞こえ、山や海の色が目に見える」(Letters 6: 325-26)と述べている。このマグナ・グラエキア、特にイオニア海沿岸の旧ギリシャ植民市への関心は、その時期に読んでいたルノルマンの『大ギリシャ』(La Grande-Grèce, 1881-84)の影響によるところが大きいと言っているだろう。¹³ルノルマンのこの本が、タラントからメタポント、シバリス、ロッサノ(Rossano)、コトローネ、カタンツァーロ、スクイラーチェへと、マグナ・グラエキアを北から南へたどって詳細な記述をし、ギッシングもほぼ同じルートをたどっていることから、この本への傾倒が伺える。ギッシングはルノルマンの本がたいそう気に入る、初めはカッシオドールスの世紀だけを研究する予定が、結局は全部読むつもりになったらしい。8月28日の手紙には「大きな(タラント)湾の沿岸地域へと旅し、念頭にある本の素材を得よう」(Letters 6: 330)ともあり、『デイリー・クロニクル』誌(Daily Chronicle)に送る旅行の短信の約束から、カラブリア地方の紀行記執筆にまで構想を膨らませていくことがわかる。

以上の概観で、『イオニア海のほとり』の母体となっているカラブリア旅行の特徴とも言える点が、異民族とローマ人の文化的融合やキリスト教の理想を扱う歴史小説の構想、マグナ・グラエキアへの関心、紀行記の執筆といった、かなり具体的に「まじめな目的を持った旅」(Letters 6: 342)であることが浮かび上がってくるように思う。ただし、現行の『ヴェラニルダ』の中ではカラブリアは舞台背景にはなっていない。従ってギッシングの旅行が歴史小説の取材のためだったとは一概に断定し難い。しかしこの時期、カラブリアを一人旅していた時のギッシングの心を最も強く捉えていたのが、6世紀イタリアの歴史を背景にした小説の構想であったことは紛れもない事実である。そこで本稿は、紀行文学として、マグナ・グラエキアや古典古代への憧

憬として『イオニア海のほとり』を捉えるのと同時に、『ヴェラニルダ』との関連からも多少とも具体的に考察してみたいと思う。

第2節 ギッシングの「イタリア紀行」

紀行文学というのはその性格上、訪れた土地の風俗習慣、名所旧跡の案内から、出会う人々との交友やその観察などが中心をなすが、それとともに、旅人その人の個性もまた随所に現れてくる。例えば、D・H・ロレンス(D. H. Lawrence)の『海とサルデーニャ』(*Sea and Sardinia*, 1921)の場合は、シチリアからサルデーニャへの旅の見聞も確かに面白いのだが、何と言ってもロレンスの個性的な旅の動機により強い関心が集まるであろう。「何か絶対的な動く必要」¹⁴に駆り立てられ、今までギリシャ人、ローマ人、アラブ人等の征服を受けずに、「外側に、文明の境界の外側に位置している」(Lawrence 3)サルデーニャに着目し、文明以前の原始の世界を求めていき、「オープンで男らしく、率直な」(Lawrence 80)サルデーニャの住民に目を留めるのはいかにもロレンスらしい。『イオニア海のほとり』の場合も、ロレンスとは違った意味で、作者固有のものと呼んでもいいような傾向が、全編の基調をなしているように思われる。

言うまでもなくギッシングが求めたものはギリシャ、ローマの古典古代世界である。彼の知的関心は、「现实生活から逃れ、少年時代に空想して楽しんだあの古の夢の世界にひたっていくこと」(6)であり、¹⁵「マグナ・グラエキアで2つの泉の水が合流し交わっていく。その流れの味わいはまさに格別だろう」(6)と言うように、幼い頃から憧れていた土地を実際に訪れることは何にも代え難い魅力であったと思える。しかしそうは言っても、遺跡を訪れて感慨にひたるだけがこの作品の中心というわけではない。訪れる先々で彼が目にするものは遺跡だけではなく、何も残っていない、古の面影をとどめない、あるいは史跡とは無関係のものも含まれている。にもかかわらずそれらは全て彼の心を古典古代へと駆り立てるだけの感銘を与えている。今は何もないシバリスの駅を通る時「消え去りし栄光の記憶が心を捉え」(29)、変貌してしまったタラント市街にプラトン(Plato)やハンニバルの足跡を偲び(31)、また、水量が減り葦に覆われ川の水も見えないガラエスス川、痕跡もとどめないカッシオドールスゆかりの場所にも強い感銘を覚える。「その時代のことを知り始めているという実感がある」(*Letters* 6: 301)ギッシングにとって、目の前に昔の名残りがあのかどうかはあまり重要ではない。彼にとって

の实在世界は目の前の光景ではなく、あくまで心の中で再創造されたギリシャ・ローマの古典古代像であろう。すでに失われてしまったものを求める旅は、「目を半ば閉ざせば本当のタラントゥムを想像できる」(39)人にとっては、再構成されている古典古代の一面を実際の場所に投影する旅と言ってもいい。この点ギッシング同様古典古代の世界に通じ、同じカラブリアを旅したノーマン・ダグラス(Norman Douglas, 1868-1952)の場合とは幾分異なる。ダグラスはその著『オールド・カラブリア』(*Old Calabria*, 1915)の中で、目の前で繰り広げられる情景から現実の問題の方に考察を進める。ホラティウスが描いた昔の光景が失われているのを目にすると、「この地方の森林伐採が川の流れを失わせ、河床を堆積物で詰まらせ、蚊の繁殖に都合のいい水のよどみを生み出し、イタリア各地で疫病の蔓延を助長している」と指摘している。¹⁶ ガラエスス川に関して、「もっと上の土地の森林が伐採され、そこから流れ出した土でもととの水源が干上がり、水はやむなくずっと下の層へ入っていき、そのため水量が減り川の流れは短くなってしまったのかもしれない」(Douglas 93)と、その水脈の枯渇を森林伐採の点から捉えている。

ギッシングの場合も、コトローネでスクルコ先生から、雨が降らないその土地の原因として森林伐採の話聞くが(99)、それはアクチュアルな問題になるというより、むしろ自分の心象風景の具体化につながっていく。病気になると、意識もしないのに古代の情景や生活の一面が次々に走馬灯のように現れてくる。事物のディーテールに関して、実際に存在しているかのように具体的に再現されていく。古の情景がまざまざと浮かび上がってくると、作者にはそれこそが“real”なものに思えてくる。

That gate of dreams was closed, but I shall always feel that, for an hour, it was granted me to see the vanished life so dear to my imagination. If the picture corresponded to nothing real, tell me who can, by what power I reconstructed, to the last perfection of intimacy, a world known to me only in ruined fragments. (85)

このように無意識的に再現される古典古代像は、単なる空想的産物というより、作者の内面に実在する本物の光景という感じがする。『イオニア海のほとり』が出版された時、この作品への賛辞として、旅先の世界へと読者を引き寄せる絵画的描写の妙が指摘されている(Coustillas and Partridge 386, 388)。確かにギッシングは訪れる先々での風景や人物像を生き生きと描き出していくが、その時でも作者の目に映るのは内面にある心象風景の方である。シラ山(Sila)を飽かず眺めていても、その山腹で切り倒した木で船を作るギリシャ

人の職人の姿や、昔のギリシャ人の羊飼いが足を踏み入れて以来誰も入ったことがない森の中の小道が浮かび、「静まりかえった森の源泉の傍らに腰を下ろし、空想の翼を存分に伸ばしたい」(23)と考える。また町の公園で見かけた人々を観察している時も、「まじめで知的な感じの、目鼻立ちの整った個性あふれる顔立ちを認め、勇敢な祖先のブルッティ人もこうではなかったか」(24)と考える。本格的な文献の研究によって頭の中に古代世界が実在しているため、浮かび上がってくるイメージは実に詳細で具体的なものになっている。

ギッシング自身最初のイタリア旅行の際に旅の伴侶として熟読した、ゲーテの『イタリア紀行』(*Italienische Reise*, 1816-17)との最も大きな相違点の1つはここにあると言えよう。「今実行に移しているこの決心をもししていなかったら、破滅していたのではないか。それほどイタリアの風物をこの目で見たいという願望が私の気持ちの中で高まり熟しきっていたのだ。歴史的知識に促されたのではない。これらの事物はほんの手の幅ほどにしか私から離れていなかったのだ」とか、¹⁷「肝要なことは、自分が元通り世の中に関心を抱き、自分の観察力を試験し、自分の学問や知識がどの程度のものであるか」(Goethe 35)等を知ることを重んじたゲーテにとって、旅の目的は「種々の対象に触れて本然の自己を悟り知らんがため」(Goethe 61)であった。確かにゲーテにも、遺跡に関して、「廢墟や不完全な形で眺めている場合に、すこぶる刺激的で意味のあるものになっている」という側面もあり、¹⁸「瓦礫の中からもとの姿を、がらんとした円形劇場から人々の姿を、石棺の断片から神々しいギリシャ人の姿を作り上げていく。それが彼の見方であり、預言者、詩人の見方なのだ」(Friedenthal 291)という意見に見られるように、古の世界の再現を行なう傾向は見られる。しかしそれはあくまで、目の前に見える遺跡などを基にして、元の形を空想して復元していくことであり、ギッシングにしばしば見られるような、何もない無の空間、自然の光景に自分自身の脳裏にある実在世界を還元するのとは、かなり趣を異にしているのではないだろうか。

第3節 静寂と喧騒をめぐる

一連の旅を終え、夕闇に沈んでいくレッジョの町を歩いていく作者の心境が記された後、作品は次のような印象的な一節で閉じられている。

Alone and quiet, I heard the washing of the waves; I saw the evening fall on cloud-wreathed Etna, the twinkling lights come forth upon Scylla and Charybdis; and, as I looked my last towards the Ionian Sea, I wished it were mine to wander endlessly amid the silence of the ancient world, to-day and all its sounds forgotten. (168)

最後の一文に関しては、おそらく作者の願望に共感する読者も少なくないことだろう。「現在の喧騒の一切を忘れ、古代世界の静寂の中を果てしなくさまよって」みたいと考えるのは作者一人ではないだろうし、毎日の生活に追われる人にとってはある意味で理想的な立場かもしれない。「イオニア海のほとり」という作品の基調は紛れもなくこの「古代世界の静寂の中をさまよう」ことにある。しかしそれと同時にもう1つ注意しなければならないのは、静寂の世界への願望が一方で確かに作者の真情からでたもののだとしても、その願望はあくまで願望のままであって、実際に作者がそれを実現するかどうかは別問題であるという点だ。つまりギッシングは、「静寂」に大きな価値を置いていても、「喧騒」を常に全否定しているわけではない。

『ヘンリー・ライクロフトの私記』が念頭にあると、「ギッシング」という人物には、人との交わりを避け、花鳥風月を友とする隠者のようなイメージを抱いてしまうだろう。確かに俗悪なものを嫌い、古典を愛する読書家ではあったが、『イオニア海のほとり』に投影されている作者像は、単に孤独を愛する孤高の旅人などではない。むしろ音の喪失を嘆き、健全な人々の日常生活を求めていこうとしている。作品の第1章で作者は旅の目的などを述べると同時に、ナポリ市内の変貌に少なからず関心を示している。以前は大声を上げて道行く人たちを追い散らした荷車引きの男たちが妙に静かになり、キアア通り (Strada di Chiaia) も耳をつんざくばかりの喧騒はなくなってしまった。手回しオルガンの懐かしい響きも聞かれなくなって久しい。何故作者は作品の冒頭でこうした音の喪失に触れなくてはならないのだろうか。静寂を求め、人との交わりを避けたいのなら、日常の音の世界などどうでもいいはずではないか。むしろ町の中の、俗悪でない健全な生活の営みそのものにも関心があるから、音の喪失に敏感になるのであろう。まわりの事物を冷静に客観的に観察していても、そこには決して冷ややかでさげすむ調子はなく、むしろ暖かさとする種の共感がそこはかとなく漂ってくる。そして敢えて言えば、作者はそうした一期一会的な出会いを楽しんでいこうとしている。一見孤独な夢想者の散策のイメージを前面に出しているように思えても、決して日常の世界の喧騒、人間的交わりに背を向けてはいない。その部分に作

者の人となりがかくつきりと浮かび上がってきて、『イオニア海のほとり』という作品をよりいっそう読み応えのあるものにしてきているように思える。

以上の観点から言えば、作品の第8章が1つの転換点になるかもしれない。それ以前は旅の目的になるべく忠実に従い、憧れの土地を訪れる古典愛好家の側面が強く出ている。コトローネに着き、その町がクロトン (Croton) と呼ばれた頃の遺跡に関心を示し、当時の町の中心を流れたとされるエサルス川 (Æsarus) の所在などを確かめようとしたり、昔勇姿を誇っていたという、ラキニア岬の先端部分にあるヘラの神殿を訪れようとした時も同断である。しかし町の墓地を訪れてそこで「この地域の普通の住民より、物腰や言葉遣いがずっとあかぬけた」(68) 墓守に出会い、「彼の素朴で善良で、賢い所」(69) に印象を受けると、「彼が今なお庭の壁の中で、コトローネの死者の上に咲く花を育てながら、静かで幸せな暮らしをしていて欲しい」(69) と考える作者の目には、対象となる人への人間的興味に立脚した暖かさが加わってくる。作者が病気で寝たきりになる第9、10章では更にこの点が顕著になってくるように思える。

体調に異変が生じ、食欲もなくなると、コンコルディア旅館の料理を機械的に口に入れるドン・フェルディナンド (Don Ferdinando) の食べっぷりや、まるで文句を言うために食べにくる客たちに作者が興味を引かれる様子も面白いが、何といても最大の魅力は、作者発病後のスクルコ先生たちとの交わりの部分だろう。スクルコ先生の人柄は、作者の病気を(十分その深刻さは承知しているのに)ことさら深刻に扱わないようにしている部分にいかんなく示されているし、召使女との口論に明け暮れる宿のおかみも病人に対しては実に親切であり、イタリア語の3人称女性形で丁寧さを表せる客室係の少年が、この土地で出会った人の中でも1、2を争う洗練さを持っているというのも興味深い。この章にはこの紀行記の中で随一の人間的な交わりに基づく一種の異文化体験が描かれているだけでなく、描く側の作者の人間像についても、単なる傍観者にとどまらず、病人の不安感を夜の訪れへの恐怖という形での確に捉え、生身の作者像を提示している。

次のカタンツァーロの場面でもますますこうした側面がクローズアップされている。そもそもこの土地は古代都市ではない。従って作者も「単にすばらしい環境の中にあるイタリアの町として見る」(111) つもりで訪れている。事実山の上にある町から眺めた自然美は人を捉えて放さないものがある。しかし作者の目は自然より人間の方に向かっていく。町の博物館に足を運んでも、「健康が回復して、外の空気や街の生活の方が気になった。かび臭い遺物

などはほんやりと見ただけだった」(120)。「マラリアにかかった住民の間で暮らした後は、山地の人々の健康そうな様子を楽しみ」(120)、体の不自由な物乞いですら哀れみを感じさせないくらい健康そうに見え、路傍の子供たちが遊ぶ姿は見ていて楽しくなる(120)。スクイラーチェのカッシオドールスゆかりの養魚池(と思える)場所を訪れた時も、洞穴の中までずっと案内をしてくれた二人の鉄道員が、あくまで作者への好意から案内をしたのだと言わんばかりにチップを断固として受け取ろうとはしない姿が印象的に語られている(155-56)。食事代に法外な値段を要求したスクイラーチェの国民宿舎の主人を除けば、「私はすべての人と穏やかな交わりを望んでいる。イタリアでは何気なく知り合った人でも、宿の主人や御者とでも別れる際はほぼ決まっただけであった」(139-40)と言うとおり、作品の随所に控えめながら、争いや反目を嫌う作者の平和的精神、友愛的精神が見出される。

第4節 『ヴェラニルダ』への序曲

以上述べてきたように、『イオニア海のほとり』の特徴として、古典古代への憧憬を基軸に、日常の喧騒世界への人間的興味、及び作者の平和的精神の発露が見出される。更にギッシングの場合、異文化体験に際して静寂と喧騒の「両者が融合し、1つの調和の取れた全体が作り出されて」いくことは注目してよいだろう。文明国イギリスから未開のカラブリアに足を運べば誰でもその野蛮な風俗習慣に軽侮の念を抱くことだろう。しかしそうした瞬間、敬愛するギリシャ、ローマの文化に生まれた土地、侵略と篡奪の長い歴史を経て培われてきた国民性などに思いをはせ、作者は今までの傲慢な自分を反省し、自然に頭が下がる思いになってくる。

カラブリアを旅していた当時のギッシングと交流していたアメリカ人ブライアン・ダン(Brian Dunne)の回想記によれば、ギッシングは内気で、「口達者の揃う典型的なラテン系ペンションでは目につき」(Mattheisen et al. 104-05)、自分の殻に閉じこもって、食事時以外は誰とも口を利かないので密かにマークされていたそうである。自分とは異質な世界に対して時として嫌悪、軽蔑の念が浮かんでくることは仕方ない。しかし親しく交わるようになると、「これまで出会った人の中で最も快活で、悦楽を好み、機知に富んだ一人」(Mattheisen et al. 2)という後年の感想もまたギッシングの真実の姿であろう。『イオニア海のほとり』においては、イタリアの歴史、偉大な文化を通して、作者は自分自身に対して誠実な反省を加えている。

コトロネに滞在していた時、初めはその土地の貧弱で、住民の不健康
そうな外見に対し良い感情は持てないでいた。しかしそこで最初に耳にした
ながしのオルガンのメロディと、合わせて歌われる歌声に魅了されると、
それまでその町や住民に対して密かに抱いていた悪意を改め、「偏狭で恩知ら
ずな自分自身を激しく責める」(95)ようになる。「イタリア人の欠点などは、こ
のイタリアの空の下で彼らの音楽が奏でられた瞬間、一切を許す気持ちに圧
倒的に傾き」(95)、征服や侵略というイタリア人の長い歴史を思い描くと、
「イタリア人の陽気で軽やかな調べの中にも、遠い昔の悲しみが響いてくる」
(95)のを感じる。

Moved by these voices singing over the dust of Croton, I asked pardon for all my
foolish irritation, my impertinent fault-finding. Why had I come hither, if it was not
that I loved land and people? And had I not richly known the recompense of my
love? (96)

「イタリアの土壤に根を下ろした素朴な人たちの間を旅する異国の人間が、自
国への優越さを抱いたり、相手を見下し、いらだつ権利などはない」(96)と
言い切る部分には、愛する異文化に対する作者の敬意が感じられる。古典古
代への憧憬は作者の平和的、友愛的精神と見事に調和し、この作品に美しい
彩りを添えることになる。

『イオニア海のほとり』には、「テオドリクスと彼の大臣(カッシオドールス)
は、(中略)ゴート人とラテン人が融合して新しい民族になる独立国家イタリ
アを建設しようとしていた」(144)といった記述に示されるように、カッシオ
ドールスや6世紀のイタリアの歴史への言及がしばしば見られ、明らかに歴
史小説『ヴェラニルダ』の執筆を意識していたことが見て取れる。しかしこ
で注目したいのは、歴史上の事件やその展開というより、『イオニア海のほと
り』で示唆された作者の精神が、『ヴェラニルダ』の中で更に具体的に継承
されている点である。『ヴェラニルダ』で「キリスト教の理想と古代ローマ
精神の葛藤」というテーマが最も強く打ち出されている箇所は、カシナム
(Casinum)における主人公バジル(Basil)の再生の場面である。敢えて言え
ば、この部分に上で述べた『イオニア海のほとり』の精髓とも言える要素が、
発展的に取り上げられているように思われる。

ゴート族の王の血を引くヴェラニルダを愛したローマ人バジルは、拉致さ
れた彼女の行方を追ううちに、親友のマーシャン(Marcian)がヴェラニルダ
に対して横恋慕し、自分を裏切っていることを知る。逆上して彼を殺害し、

ヴェラニルダを不実な人間として一方的に非難した後、病に倒れ、カシナムの僧院で聖ベネディクトゥスと出会う場面となる。ベネディクトゥスは、通常ホジキンのように、預言者として、どちらかと言えば厳格で日常の欲求や喜びからかけ離れたことを説く聖人 (Hodgkin 4: 432-33, 440) として描かれるが、ギッシングは彼なりの解釈を加えて描いているように思う。バジルは初め、修道士たちが俗世間の関心事、熱情や重荷から離れているのを目にし、「宗教生活の最高の勝利」(Veranilda 287) が僧院内にあると感じる。親友を殺害したことへのやりきれない思いや、恋人を非難したことへの自責の念にさいなまれて、バジルはベネディクトゥスに救いを求める。しかし単に俗世間を離れ、敬虔に神に祈りをささげる毎日に入ることが心の平安になるとは限らない。ベネディクトゥスの話を聞き、彼が薦める本を読んでいくうちに、バジルはいくつかの点に気がついていく。聖書の中の「詩篇」を読み、聖書は「あらゆる形態の世俗的幸福」(304) を否定しているわけではなく、妻との間に子供を作って暮らすという「彼の心の中に抱く希望を奨励している神の御言葉」(304) を見て驚く。僧院内の写本の作成では、異教徒時代の文献や詩も禁止されることなく写され、昔の詩人を読むことは「精神の糧」“the food of our spirit” (305) であるという。ベネディクトゥスは自分たちだけが純粹で神聖な生活を送ればよいと考えているのではないとバジルに言う。

‘[. . .] But to us, by the grace bestowed upon our holy father, has another guidance been shown. Know, my son, that, in an evil time, we seek humbly to keep clear, not for ourselves only, but for all men, the paths of righteousness and of understanding. With heaven’s blessing we strive to preserve what else might utterly perish, to become not only guardians of God’s law but of man’s learning.’ (306)

確かにキリスト教は単なる禁欲主義ではなく、正しいものと理解することの道筋を示し、神の法と人間の知を守る使命を持ち、「闇の力」“the powers of darkness” (306) と戦う厳かな側面がある。この点に、バジルは新たな光を当てられ、「より幅の広い、気高い側面」(306) を見出す。しかし修道院と、ローマ人としての将来の間を揺れ動くバジルの心に別の光を投げかけたのは、「あなたをいたたまれない気にさせるこの世の争いごとも、至高の存在の栄光に役立つかもしれない」(316) という、必ずしも現世の事柄を否定しないベネディクトゥスの寛容な言葉であった。そして「もしかすると神は、神聖な法への自分の罪を許してくれるかもしれない」(314) と思えたり、友として愛したマーシャンの永遠の平穏を毎日祈っていける心の平安を得て(330)、ヴェラニ

ルダとの関係に、「日常のキリスト教」“Christianity of everyday” (288) に立脚した理想的とも言える精神的交わりを築いていけるようになる。キリスト教の理想の問題は宗教上の問題を越えて、広く人間の苦悩として捉えられている。そこに『イオニア海のほとり』の作者の人間性や問題意識のいくばくかが投影されていると考えてもあながち間違いとは言えないであろう。

第5節 「詩と真実」

以上述べてきた問題とは違って、『ヴェラニルダ』は未完の作品のため、未解決のまま終わってしまう問題もある。ギッシングがラストシーンに想定していたとされる荒涼としたローマの廃墟の光景は、¹⁹ その後の史実の展開から見ると一時的なものだし、²⁰ アウレリア (Aurelia) に具体化された異文化間の信仰上の問題はついに解決を見ない。しかしキリスト教の理想と古代ローマ精神の問題に限定してみれば、作品はそれなりの完成度を示しているとも言える。歴史小説と紀行記というジャンルを異にする両作品を同次元で扱うことは本来ならきつと慎むべきことなのだが、いずれの作品も、社会の現実を直視し続けてきた従来のギッシングの作品には見られない新たな地平を開拓したものであることは論をまたないだろう。²¹

一般に自伝文学の場合、事実を淡々と物語る形式をとりながら、その実相においては、作者の想像力による「詩」の世界が自然に加わってくることが多い。ゲーテの『詩と真実』(Aus Meinem Leben, Dichtung und Wahrheit, 1811-32) などはその典型的例と言ってよい。ギッシングの『イオニア海のほとり』は、それとは多少異なるにしても、歴史へのロマンを前面に出しつつも、作者自身の「真実」をも物語っている点に、1つの魅力があるような気がする。この作品が、どこまで文学作品として評価されるかは今後の研究の進展にゆだねるとしても、少なくとも、歴史へのロマン、随所に見られる詩的な散文というポエティックな美しい縦糸を紡ぎ、折に触れて作者自身の生身の人間像、真実の人間性あふれる姿を提示する横糸を配した、それまでのギッシングの小説とはいささか趣の異なる、一種の「詩と真実」の書としても、永遠に心ある読者を魅了し続けていくのではないだろうか。

註

テキストは George Gissing, *By the Ionian Sea: Notes of a Ramble in Southern Italy* (London: Chapman and Hall, 1901) を使用した。

- 1 Karl Baedeker, *Southern Italy and Sicily* (Leipzig: Karl Baedeker, 1930) 287 及び Edward Gibbon, *The History of the Decline and Fall of the Roman Empire*, ed. Dean Milman and M. Guizot, vol. 4 (London: John Murry, 1854) 112 を参照。
- 2 ギッシングによる 3 回の南欧旅行の詳細に関しては、小池滋訳『南イタリア周遊記』(岩波文庫, 1994) の中に、訳者による簡明な解説があるのでそれを参照されたい。
- 3 1897 年 8 月 30 日の時点でも依然としてシチリアは選択肢の中に含まれている (*Letters* 6: 331)。
- 4 10 月 7 日に激しい咳と少量の咯血が日記に記されている。
- 5 George Gissing, *The Unclassed* (Brighton: Harvester, 1983) 43–46. また具体的にはローマの英雄ステイリコ (Stilicho) への関心が述べられている (68)。
- 6 Pierre Coustillas, introduction, *Veranilda* (Brighton: Harvester, 1987) xii 及び *Diary* 377–84 を参照。
- 7 Thomas Hodgkin, *Theodoric the Goth* (London: Putnam's, 1891) 128.
- 8 Ferdinand Gregorovius, *Geschichte der Stadt Rom im Mittelalter*, vol. 1 (1859–91; Stuttgart: Cotta'sche Buchhandlung, 1922) 284. なお訳出に当たっては Gregorovius, *History of the City of Rome in the Middle Ages*, trans. Gustavus W. Hamilton, vol. 1 (London: George Bell, 1900) 294 を参照した。
- 9 例えば Jacob Korg, “Gissing and Ancient Rome,” *A Garland for Gissing* では、こうした点に関して、「日光で投げられた影」“the shadow cast by sunlight” (232) の部分を好むギッシングの気質に言及している。
- 10 Thomas Hodgkin, *Italy and Her Invaders*, vol. 3 (1879–99; Oxford: Clarendon, n.d.) 2.
- 11 Gibbon 313–15.
- 12 Gregorovius, vol. 2, 12.
- 13 François Lenormant, *La Grande-Grèce: Paysages et histoire* (1881; n.p.: Elibron Classics, n.d.) ギッシングは『備忘録』の中で (1896 年 2 月から 97 年 6 月の間の記録らしいが)、「ささやかな知的願望」の 1 つとして、マグナ・グラエキアを完全に知ることを挙げている。Korg, *Commonplace Book* 26.
- 14 D. H. Lawrence, *Sea and Sardinia* (London: Heinemann, 1956) 3.
- 15 訳出に当たり、上記小池滋訳を参照した。
- 16 Norman Douglas, *Old Calabria* (1915; London: Phoenix, 2001) 46.
- 17 Johann Wolfgang Goethe, *Italienische Reise* (Frankfurt am Main: Insel, 1976) 129. なお引用は、相良守峯訳『イタリア紀行』(岩波文庫, 2001) による。

- 18 Richard Friedenthal, *Goethe: Sein Leben und seine Zeit* (Frankfurt am Main: Büchergilde Gutenberg, 1965) 291.
- 19 Gettmann 272 及び A. C. Gissing, "Gissing's Unfinished Romance," *George Gissing*, ed. Francesco Badolato (Roma [Rome]: Herder Editrice, 1984) 244 を参照。
- 20 Gregorovius, *History*, vol. 2, 425-70 及び Hodgkin, *Italy*, vol. 4, 443-645 を参照。
- 21 例えば Coustillas, *Veranilda* xxviii を参照。

(並木幸充)